



2011年10月28日から11月8日まで中国を歩いた。

歩いた地域は、華北と華中の一部である河北省、山東省、江蘇省のある。

目的は書の真筆に触れ、書について深く思索することと、中国を肌で感じることであった。  
しかし、ぼくは風のように大陸を走り抜けたに過ぎない。  
書は謎に満ち、大陸は広く、そこに住む人は豊かな心を持つ懐かしい人びとであった。



## 北京 蘭亭八柱亭から故宮博物院（紫禁城のこと）へ。



蘭亭特展（午門は故宮博物院の南門である。午門の二階に午門展厅がある）

午門

今年2011年は辛亥革命100周年を記念して台北と北京の故宮博物院で大規模な書展が開催された。

北京の故宮では午門展示の「蘭亭特展」と延禧宮での「蘭亭珍拓展」とあわせて蘭亭序に関する中国での最大規模の特別展が開催された。虞世南、褚遂良、馮承素等などの模本と臨本、乾隆期の「蘭亭八柱」帖など北京故宮博物院の蔵品141点を中心として全157点が出展された。





乾隆帝題字



乾隆帝題識



乾隆帝の繪 董其昌跋文 本幅



王肯堂題記



午門展厅の「蘭亭特展」会場

江左風華

乾隆帝題字



董邦達の繪と記



沈德潛題記



午門展厅の「蘭亭特展」会場



王興之墓誌 東晋(340年)

王興之は王羲之の叔父 部分



平復帖 陸機 西晋

草書に近い章草



伯遠帖 本幅(約25×17cm)

題字（作品の題名）は乾隆帝、題識（作品の来歴や批評などを書いたもの）も乾隆帝、本幅（珣頓首頓首、伯遠勝情期群從之寶。自以羸患、志在優遊。始獲此出意不剋申。分別如昨永爲疇古。遠隔嶺嶠、不相瞻臨）、次に董其昌の跋文（作品の後に付けた批評や由来を書き記したもの）、その後に乾隆帝の繪、つづいて王肯堂の題記（作品の題名に対して解説した小文）、董邦達の繪と記、沈徳潛の題記があり、数々の印がある。印は作者の印や収蔵者の印などである。法帖は詩文、書画、印の中国独自の総合芸術である。

「三希堂」は清朝の第六代皇帝乾隆帝の書斎の名。王珣の「伯遠帖」という4世紀東晋時代の名筆である三つの書簡を手に入れたことを「三希」（まれなる珍しいこと）と称し、書斎を三希堂と名づけ、そこに収蔵した。「快雪時晴帖」は台北の故宮博物院、「中秋帖」「伯遠帖」は北京の故宮博物院が所蔵。

「伯遠帖」 王珣 (350—402) 東晋 行草書、

350—402 東晋 行草書、

王珣の従兄弟の王伯遠にあてた書簡。5行、47字。王珣は王羲之の甥。墨蹟はこれしか伝わっていない。

三希の一つ。

## 法帖(卷子)の形式について学ぼう。



王興之墓誌 東晋(340年)

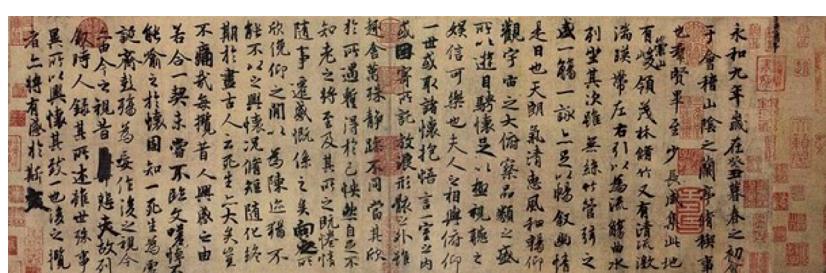
王興之は王羲之の叔父 部分



蘭亭八柱第一（伝虞世南臨蘭亭）



蘭亭八柱第二（伝褚遂良臨蘭亭）



蘭亭八柱第三（馮承素模写蘭亭）

王羲之は東晋の永和9年（353年）3月3日、47歳の頃、今の紹興市にあつた別荘の蘭亭に41人の友人を集めて曲水の宴を開いた。その時、友人たちの詠んだ詩集のための序文を王羲之が書いた。その草稿が蘭亭序である。28行、全文字数324字、行書。書道史上最高傑作とされている。力の均衡による造型感覚の書は、この時代には王羲之の書以外には見あたらない。書聖と言われる所以である。王羲之の真筆は一点も残っていないので、蘭亭序の本物もまだ見つかっていないが、唐の太宗皇帝が掲書人にコピーさせたものと、初唐の三大家に臨書させたものと、それらを石に刻し、それを拓本にしたものなど100種以上が伝わっている。大別して墨蹟本（双鉤填墨本と臨書本）と刻石拓本（石に彫ったものの拓本）がある。

### 「伝褚遂良臨本蘭亭序卷」 唐

「八柱第一本」。虞世南の臨書と伝えられているが、疑問。

淡黄紙本。縦24cm。本幅、その後に米芾の行書詩題、蘇耆の題記、宋人十数人の観款、卞永譽などの跋文がある。終りに「臣張金界奴上進」とあるところから「張金界奴本」とも呼ぶ。白麻紙本。縦24.8cm。乾隆帝の題識、本幅、董其昌はじめ十数種の跋文がある。汚れをとるため何度も洗われ、その上から淡墨で加筆されたため筆勢がなくなっているようだ。

### 「馮承素、蘭亭序卷」 唐

「八柱第三本」。掲書人の馮承素の作と伝えられている。卷首に唐の中宗の神龍年号の

「神龍」の半印があるところから「神龍半印本」と呼ばれている。白麻紙本。縦24.5cm横69.9cm。

乾隆帝の題字、乾隆帝の題識、本幅、許将の跋文、朱光裔・李之儀の跋、王安礼・黃慶基の跋文、李秬・王景通

の跋文、王景脩・張太寧の跋文、仇伯玉・朱光庭の跋文、景欧父の跋文、趙孟頫の跋文、郭天錫の跋文、鮮于枢の

題記、鄧文原の題記、王守誠、王廷相、項元汴、文嘉、多くの収蔵印が押されている。

## 代表的な法帖

「獨孤僧本」

趙孟頫が僧の獨孤からもらった刻本。「獨孤長老人本」

どくこうそうほん  
どくこうちょうろううほん

「定武本」

北宋の慶暦年間（1041～48年）に定州の定武軍庫（軍とは行政区の名）から発見されたので定武本といわ

れている。歐陽詢の臨本を刻したものと伝えられ、多くの種類がある。

多くの書の大家がこの定武本を学んでいる。定武原石の単帖には、五字未損本の落水本、吳炳本、韓珠船本、五

字已損本の獨孤長老人本がある。「神龍半印本の刻本」「張金界奴本の刻本」

かいこうほん

開皇本

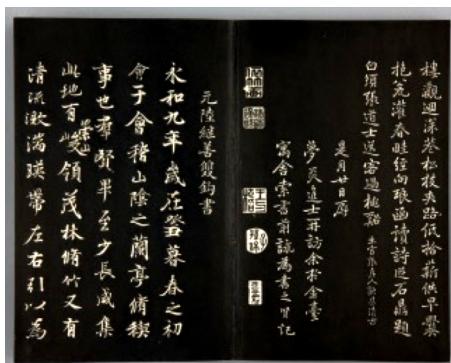
本文の終りに「開皇十八年三月廿日」とあるところからこの名がある。

「開皇本」

本文の終りに「開皇十八年三月廿日」とあるところからこの名がある。

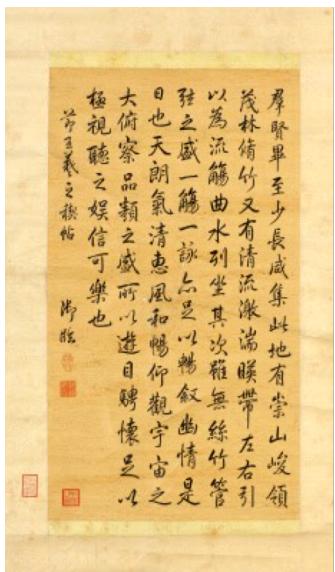


宋拓「定武本蘭亭序」伝歐陽詢臨

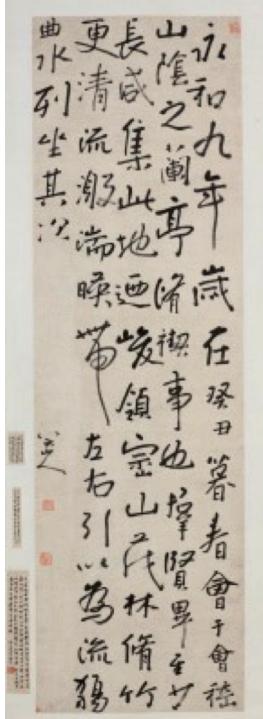


三希堂法帖の蘭亭序

## 様ざまな蘭亭序の臨書



乾隆帝書「節臨蘭亭序」



八大山人臨書「蘭亭序」

このような様ざまな名家の臨書を観ると、臨書の意味について改めて考えさせられる。

八大山人は臨書によつて何を掴み、また、表現したのであろうか。

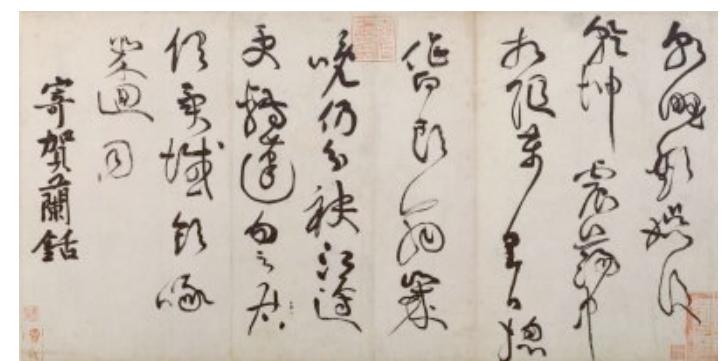
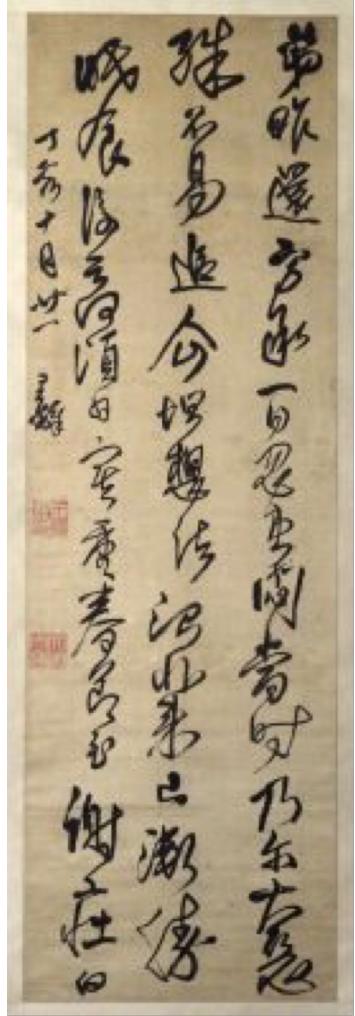
書における技術と自由とはどういうことであろうか。

武英殿書画館で「故宮藏歴代书画展」を観る。



文徵明「枯木疏篁図」

文人たちは詩书画篆刻の総合的な芸術を目指したようである。



宋、元、明、清の名家たちの書画を中心にはあまり観られない作品が多く展示されていた。



[北京首都博物館へ](#)

2006年5月18日に開館した中国トップクラスの博物館である。

「古代磁器芸術銘品展」、「燕地（昔の北京地域）青銅芸術銘品展」、「古代書道名作展」、「古代絵画名作展」、「古代玉芸術品銘品展示」、「古代仏教芸術銘品展」、「古代文房四宝銘品展」などを観た。入館料は無料であった。



北京故宮博物院北門



石鼓文拓本



[皇極殿の「石鼓館」へ](#)



石鼓は現存する中国最古の石刻文字である。10基の鼓型の花崗岩に大篆で合計約650字の四言詩が刻まれている。

戦国時代（紀元前6世紀～5世紀）に秦で作られたと考えられている。

唐代に発見されるまで千年以上放置されていたため、傷みがひどく、現在残っている文字は約310字である。



吳昌碩「篆書八言聯」



吳熙載「臨完白山人書軸」

の）がある。



居庸関で「六体石刻」を見る



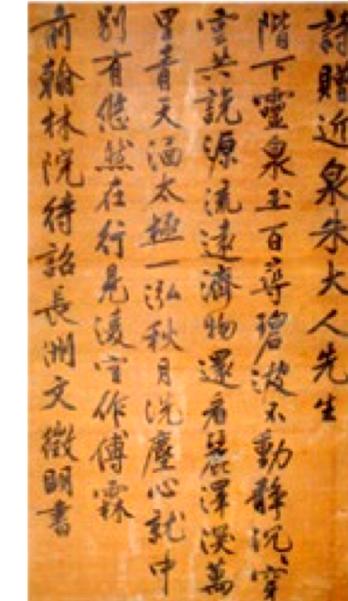
居庸関の雲台

居庸関は北京市街から北西に約50kmにある万里の長城上に造られた関所兼要塞である。元代の1345年に建てられたといわれる幅約27m、高さ約10mの

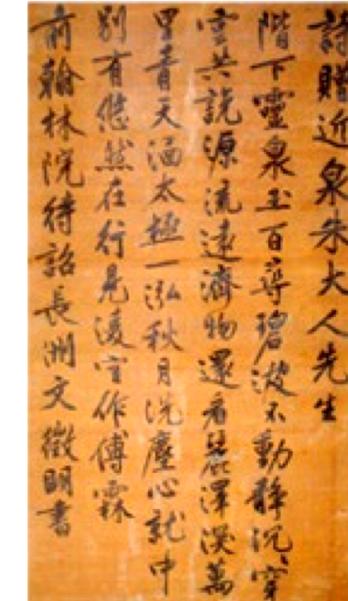
アーチ型の「雲台」（過街塔とも呼ぶ）と呼ばれる門がある。門の上にはかつてチベット式の仏塔が建てられていた。上部のレリーフはインドネシアの神鳥ガルーダと蛇神の女神ナーダが彫刻されている。門の内部には四天王のレリーフと造塔功德記（塔建設の由来を書いたもの）がある。



景德鎮窯青花「昭君出塞」図罐



文徵明「贈朱近泉詩」



詩贈近泉朱大人先生



文徵明「江南春色圖」



王鐸「唐詩九種」

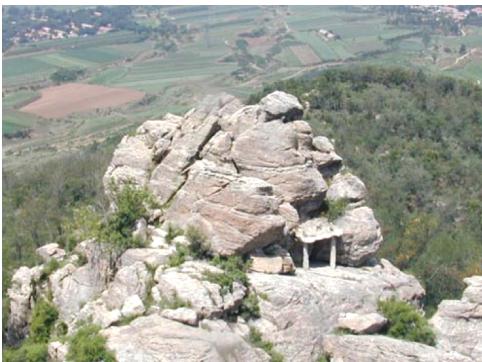
他に、黃庭堅の草書や趙孟頫など名家の作品が展示されている。北京や中国について学ぶための博物館のようである。



王鐸「嵩山蘭若圖」



雲峰山遠景



雲峰山頂上より



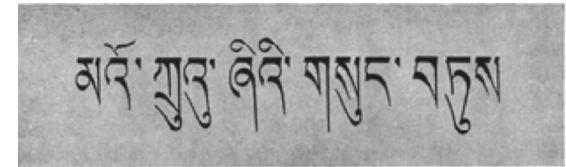
鄭羲下碑

雲峰山は莱州市街から南南東に約6キロのところにあり、鄭道昭の代表作が十数か所にある。

鄭道昭（?-516年）南北朝時代の北魏の人。字は僖伯、号は中岳先生、諡は文恭。  
書はすべて磨崖の書であり、四十数種が知られている。書歴については最晩年（511年前後）以外のことには不詳。  
書は「円筆」主体の「方筆」である。王羲之に並ぶ書の巨人とされている。  
王羲之の書が書斎芸術の華だとすれば、鄭道昭の書は野外芸術の華と評されている。

ମୁଖ ଦେଇଲା  
କାହାର ପାଇଁ  
କାହାର ପାଇଁ  
କାହାର ପାଇଁ

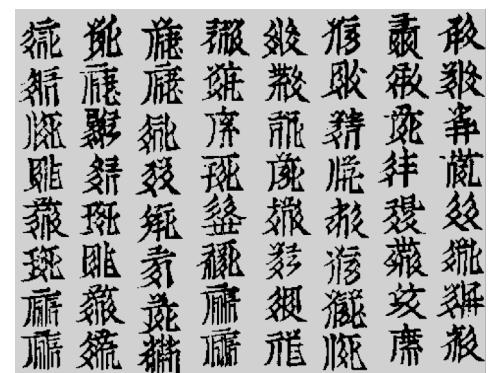
パスパ文字



チベット文字



サンスクリット語(ランツァ文字・梵字)



西夏文字

「漢字、ウイグル文字、派スパ（パクバ）文字、チベット文字、西夏文字、サンスクリット文字（ランツア文字）」の6種類の文字で書かれている。

太基山は萊州市街より東へ約10キロ。

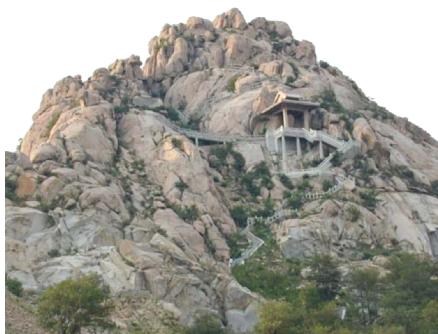


太基山



中明之壇題字

天柱山は平度から北へ25キロ。



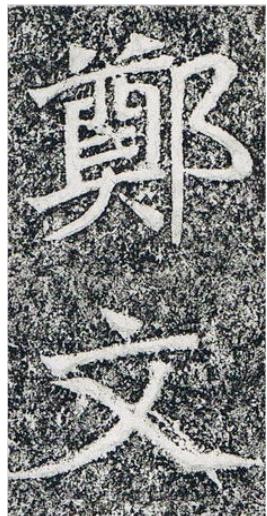
天柱山



鄭羲上碑

「鄭羲上碑」「遊息無題字」「此天柱之山」「東堪石室銘」などがある。

青州市の西南にある百峰山には行くことができなかつた。ここにも鄭道昭の「解易老十三字」「登百峯山詩」「白駒谷題字」などの書がある。



鄭羲下碑 部分



鄭羲下碑 部分



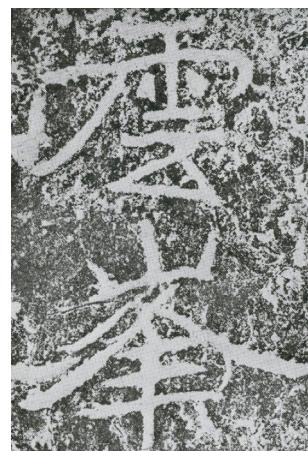
鄭羲下碑（511年）部分



論經書詩



論經書詩（511年）部分



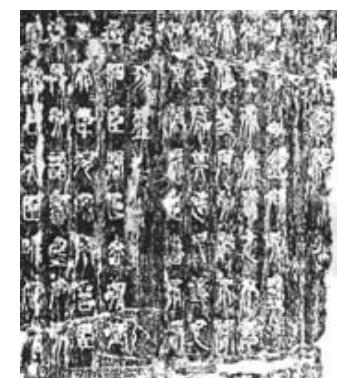
雲峰山右闕題字 部分

「南山門題字」「太基山銘告」「青煙之里題字」「歲在壬辰」「中明之壇題字」「登太基山」「詩」「玄靈之宮題字」「青門題字」「白雲之堂題字」「北山煙之寺題字」「朱陽之台題字」

などがある。



山東省博物館



琅邪台刻石 B.C. 219 年

巨大な博物館である。  
入館料無料。写真も自由に撮れる。トイレもきれい。  
一日ではとても足りないほどの書画や工芸品などがあった。

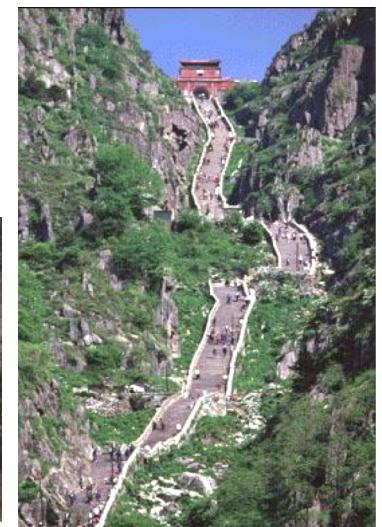


高貞碑（北魏・523年）

山東石刻芸術博物館の庭に高貞碑が置かれていた。



頂上 (1545m.)、玉皇頂



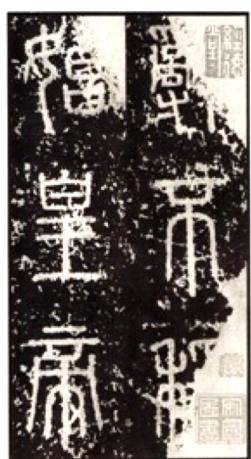
中天門から南天門へ

岱廟から泰山へ 岱廟を抜け紅門から中天門を通り南天門から頂上へ。7500段ほどの階段を登る。



岱廟の正陽門

岱廟で封禪の儀式が行なわれた。



紀泰山銘 拓本 部分

玄宗皇帝筆

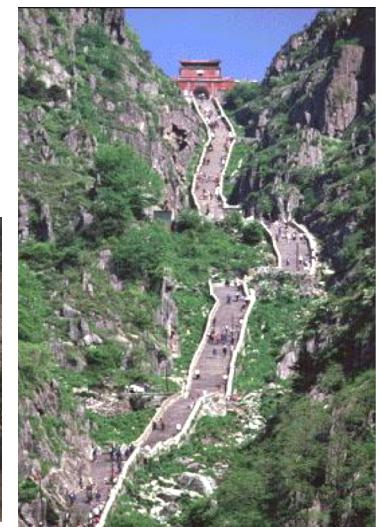


泰山刻石

泰山刻石は岱廟でガラスケースの中に保存されていた。



頂上 (1545m.)、玉皇頂



中天門から南天門へ

岱廟から泰山へ 岱廟を抜け紅門から中天門を通り南天門から頂上へ。7500段ほどの階段を登る。



岱廟の正陽門

岱廟で封禪の儀式が行なわれた。



沈周・文徵明ら吳派の書画が観られる。

蘇州博物館



揚州八怪の作品が観られる。

揚州双博館



中国三大博物館の一つ。

南京博物院（明故宮）



孔府の出口近くにある

「漢魏碑刻陳列館」  
乙瑛碑、礼器碑、張孟龍碑などがある。



孔廟



明代の巨大な石碑が林立している。



孔府



乙瑛碑 部分

※上海博物館は観ることができなかった。